



7日の授業参観・懇談会にはたくさんの保護者にお越しいただき、大変ありがとうございました。

## 許すは許される

3年生の道徳の教科書には、次のような話があります。主人公の僕は、買い物途中にちょっと肩が当たっただけの相手からいやなことを言われて、激怒！方や、違う場面で同じように肩に当たった人から「ごめん」と言われて、素直に自分もよくなかったと謝る。先日、そんな場面をもとにして話し合っている授業にお邪魔しました。

「同じようにみえるけれど、謝っているところが違うね」

「相手から先に謝られると、こっちも謝らないといけないなあと思います」

「悪いことを言われるとやっぱりむかつく。だから、自分もちゃんと謝れる人になりたい」なるほど、同じような出来事でも相手との関係（ここでは、かけられる言葉）によって、大きな違いが生まれる、という素晴らしい話し合いです。そして、自分も相手にいやな思いをさせないような人になりたいという建設的な意見に、私は感心させられました。

ただ、どうしてだろう、私には自分のことを棚に置きながら、どうしても許せない！と思ってしまうことがあります。そして、何か文句（や嫌み）まで言うてしまうことがあります。その場合は確実に険悪な雰囲気まで付録でついてきます。あ～あ、言わなきゃよかったとの後悔は、先に立ちません…

これは、性格の問題でしょうか。

寛容の心は、多様性が不可欠な現代社会の中で、とても大切な資質だと思うのです。私の恩師は、常々寛容の心について、次のように述べていました。

「もちろん、自分と違う考えや出来事には腹が立つ。なぜか。それは自分とは違うからだ」

違いを排除するメカニズムは、古代から変化による絶滅や危機を経験してきた人間には、確実にある。ただ、変化によって絶滅や危機を回避してきた歴史もまた、人間にはある。

「例えば、アーモンドの原種には毒が含まれており、人間はそのままでは食べられない。しかし、ある人が採り方や食べ方を変えたおかげで毒を取り除くことに成功したそうだ。違いは、イノベーションにつながるんだよね」

おいしそうにアーモンドを食べながら、恩師はそう言います。それは、納得します。しかし、その変化や違いに人間はムカついてしまうのですよ。

「だから、ムカつかない方法が必要なんだ。まず、『人間は多かれ少なかれ一人一人違う』ということを知ること。そして、相手よりちょっとだけ器を大きくする」

器をちょっとだけ大きくする？

「寛大な人になろうとするから難しくなる。目の前の相手より、ちょっとだけでいいんだよ、器の大きさは。相手よりちょっとだけ器を大きくして許す。それが秘訣」

なるほど。いつも許しが必要だとは一概に言えないけれど、ちょっとだけ器を大きくする方法としては、なかなかよい。目の前の一つを許せることが、まずは大切なんだな。